

第 88 回 地域まちづくり推進委員会ヨコハマ市民まち普請事業部会 会議録

日時	令和3年8月27日(金) 10:00~11:45
開催場所	泉区役所 4D会議室
出席者 【敬称略】	部会委員) 飯尾(オンライン参加)、植松、川原、後藤、杉崎(オンライン参加)、 松村 事務局) 横浜市: 萩原、村田、田口、秋浦、石田 市民セクターよこはま: 加世田、山田 横浜市住宅供給公社: 岡部、田口、都出、土屋、高橋
開催形態	公開
議題	1 令和3年度ヨコハマ市民まち普請事業1次コンテストの振返りについて 2 令和3年度活動懇談会について 3 令和3年度整備施設の状況について
決定事項	1 令和3年度活動懇談会はオンライン開催とする

議事	
事務局	1 開会挨拶 会場参加、オンライン参加を合わせ過半数の委員が参加しているため、部会開催の要件を満たしている。 部会長がオンライン参加のため、職務代理者の川原委員に司会進行を依頼する。
川原	2 議題について (1) 令和3年度ヨコハマ市民まち普請事業1次コンテストの振返りについて (2) 令和3年度活動懇談会について (3) 令和3年度整備施設の状況について 令和3年度ヨコハマ市民まち普請事業1次コンテストの振返りについて、議論を30分程度で行います。事務局から資料の説明をお願いいたします。
事務局	「資料1-1 1次コンテストアンケート結果」「資料1-2 1次コンテストYoutube視聴状況」「令和3年度ヨコハマ市民まち普請事業1次コンテスト振返り」を説明
川原	ご報告ありがとうございます。非常に多岐にわたりますので、演出については1回置いといて、植松さんから意見を詳細に出していただいて、私も「ああ、そうだ」と改めて気づかせていただいたものがありました。ここに加えるような形で御意見いただければと思います。いかがでしょうか。

松村

今回、初めて委員として参加したのですが、最初の発表を伺っていて、提案グループの発表者が「非常に緊張されているな」という印象を持っておりました。その点で、提案グループからの御意見にアイスブレイクの話がありましたが、それも非常に助かるのだらうと思います。リハーサルについても、舞台に立って上から見た様子や雰囲気味わっていただくことで、少し緊張感がやわらげられるかと思いましたが、せっかくこの日のために時間や労力をかけてやってらっしゃると思いますので、その時間を是非、十分に発揮していただきたいのが印象です。また、お昼休憩中の委員の情報交換の際は、8団体のうち、最初の団体の議論が多くなってしまい、後のほうは時間が少なくなってしまいました。時間を区切った方が良いと思います。また、議論をしすぎてしまうと、逆に審査の方向性が出てきてしまい、最後の結果に影響してしまうとも思いました。これだけ人数がいて審査をしているので、その多様性を生かすという点では、意見、情報の確認と疑問の解決をメインに話して、議論はあまり必要ないかと思いました。

川原

ありがとうございます。皆さまのご意見を一通り伺ってから少し議論したいと思いますが、他にいかがですか。

後藤

植松委員に質問です。意見交換のところで、「数年前は各委員から意見が出され、それに対して協議・検討がなされていたが、昨年からまち普請の委員が方向性を喚起する時間となっている」ということでしたが、これは懸念点ということなのでしょうか。具体的にどのようなことを詳しく教えてください。

植松

委員となって最初の2年の間は、この意見交換の時間に、例えばA委員がこういうふうに言うと、B委員から「あっ、それはこういうことじゃないですか」という議論のやり取りがありました。ところが、昨年ぐらいから、時間も短く、グループからの参加者を少なくしていることも影響しているのか、「これはこういうことですね」という確認だけで、あまり議論をされなく疑問点を洗い出す時間になってしまっているように感じました。もう少し委員同士の議論を膨らませて、投げかけた委員もほかの方の意見を聞いて、「あっ、そういうことなのか。じゃ、そういう方向でこの団体を見ていけばいいのね」という議論が欲しいと思いました。

川原

確かに、私も難しいところだとも思っていて、先ほどお話が出たように、ここで議論しすぎて、結論が出てしまう方向に向かっていくのはどうかと思います。昔もそういう議論があったような気がしています。何を情報共有しておくのかというのを今回改めて確認しておくことが大事かと思いましたが、この辺り、杉崎さんはもう委員になられて長いですけど、いかがでしょうか。

杉崎

植松さんがおっしゃられたようにこの4年は議論をする目的で意見交換をしているのですが、議論になったのは多分1回あるかないかだと思います。私たちが大分意識しないと、委員同士で議論することが難しい。

今回、昼食を取ってから議論をしましたが、食べながらでもじっくり議論しないと最後の提案グループの共有は駆け足になってしまった感じがあって、午後の公開議論の冒頭の私のコメントも、中途半端になってしまう。提案グループから話したことがきちんと反映されてないと受け止められるので冒頭の私のコメントはしっかりやらないといけない。今回のコンテストでは、昼の時間の使い方が一番改善すべき点だと思います。

川原

情報収集タイムでホワイトボードを導入した結果、提案グループのコメントが以前よりも分かりやすくいっぱい拾えるようになったので、それを確認するだけで時間が過ぎてしまっている気がします。以前は、情報量が少なかったので、ある意味、一番のポイントだけが議論できたのかもしれない。

杉崎

情報収集タイムで拾う情報量が多くなることは、全体としては良いことですが、情報量が多すぎて昼の時間だけでは処理ができない。逆に大まかな論点は実は時間さえあれば整理できてしまう。一方で午後に議論することが減り、まったくした感じになってしまうところの整理がいます。

川原

意見交換の時間は午後の公開議論の前に杉崎さんがコメントをするための原稿をまとめる目的もあったので、以前は必死にやっていた。今は情報収集タイムの内容がホワイトボードに書き出されており、提案グループにもそれが見えることで微妙な安心感があります。ただ、まち普請の目的として公開の場で議論することは非常に重要なところなので、公開の場でない昼の場で議論しすぎてしまうこともよくない。そのあたりは改めて引き続き事務局と委員で検討していきたいと思います。

アイスブレイクやリハーサルの話は、会場が広がった結果、非常に緊張感あふれる場所になったので、今まで以上にそういうのが必要な気がします。リハーサルをするということがアイスブレイクにつながれば良いと思います。皆さまの意見はいかがでしょうか。提案グループでもあった植松先生はいかがですか。

植松

直接的な解決策ではないのですが、私どもが行ったときは、1次コンテストは模造紙だったのです。そして、仲間もたくさん来ていました。この二つの要素は非常に大きくて、模造紙というのはいい意味で手作り感いっぱい、ある意味、とても分かりにくいのです。それを、たくさん参加している仲間が「ああ」とか「こう」とか言って、棒で指したりとか、「これです」とやったりすると、全体が和むというか、お祭りの雰囲気になれるのです。ところが、コロナ対策や、アトリウムステージに立って説明するとなると、発表者はとても緊張すると思います。一方、審査員側も「さあ、これから審査

川原

するぞ」みたいなそういう雰囲気伝わってくると、いい意味で緊張します。そういう意味で、リハーサルなどで場を和ませるということも必要かと思えます。やはり場慣れしている人のほうが有利になってしまうというのはいさかいそうだなと思えます。

飯尾

コロナ対策で今はまずパワーポイントでやってみようかというふうになっていますが、模造紙のほうがいいのかという問題は今後どうしましょう。パワーポイントはその順番に話すしかないですが、模造紙だと「これ足りない」とフォローするメンバーがいたり、みんなで何とか乗り切る感があったような気もします。

川原

私も模造紙はよかったなと思えます。模造紙の中に必要なことをグループのメンバー自身で書き込んでいるため把握しやすく、全体が大まかに見えていることで、どこを説明しているというのがグループの方や審査員にもわかり、重点的なところも見つけ出すことができます。パワーポイントの画面でパツパツと切り替わっていくと、説明がどこまで行っているかということが瞬間的に分からないという感じもありました。

飯尾

一応、我々審査員の側は、手持ち資料に説明用のパワーポイントはありましたね。

ありましたが、いちいちめくってみないと分からず、一つの画面の中に単純につくっているところと丁寧につくり込んでいるところの差が、冷たい感じを受けました。模造紙にアイスブレイクのような意味合いも含んでいて良かったと思えました。

川原

杉崎さん、今まで模造紙としてきたのは準備も色んな人ができるように、パワーポイントを使えない人が準備できないことにならないようにというのもありましたよね。その辺りも振り返っていかがでしょうか。

杉崎

模造紙の良さは紙面に限られているということで情報が整理されるということがありますね。あと、リハーサルについては、事務局で時間が取れるか取れないかで、一度舞台上がるのか、1回通しでやるのかというのは議論していただければと思います。ただ、どこまでアイスブレイクをやっても、事業の説明をするとまた堅くなるものなので、一定程度仕方ないのかなと思います。ただ、初めて壇上に上がって操作して話すというのは、確かに気の毒なような気はします。

川原

今後はパワーポイントだけにするのか、模造紙かパワーポイントを選べるようにするのか、それぞれの世代の方にとっても使い勝手のいい発表の仕方は違うと思うので、少し選択肢はあってもいいのかもしれないですね。

杉崎

実態は模造紙を作成するノウハウは提案グループではなく、むしろ事務局にあるのではないかと思うのです。事務局が模造紙の作成を、ノウハウを持ってサポートすることで、逆に定形化してどのグループも似た表現になっ

事務局

ていてつまらないなとも思っていました。事務局としてはいかがでしょうか。

事務局としてはグループに対して「起承転結の流れで地域の課題をここに書き出してください」とか、書き方を一定程度導いてしまっている部分はあります。ただ、支援していて一番感じるのは、パワーポイントだとやはり作成する人が1人か2人に偏ってしまうということです。模造紙を作るのは、みんなが集まってみんなで作業するので、そういう意味で模造紙の利点ではあると感じています。

川原

それは結構大事なこともかもしれないですね。コンテストの時に1人でしゃべり切ったグループもありましたね。みんなで作れるような形にしておいて、最後それを写真で撮ってパワーポイントを作成するでもよいのかもしれないですね。発表のときに全員が見えることのほうが大事なら、パワーポイントで作っても最後模造紙として打ち出してもらうなど、それぞれの良さをもう1回検証して考えてみるというのはいいかもしれないですね。

松村

いくつかの団体の方は、それまでずっと話をされていなかった方が最後にメッセージをお話するという機会があって、そのときに心が動かされるということがあり、非常にいい時間だったと思いました。逆に振り返ってみると、それまで基本的に質疑応答形式でお話をしているので、これについてずっと考えてこられた方が中心に話をされていて、その脇にいて思いが強い人はそこでなかなかお話しにくかったらと思うと思います。あのような最後に思いを話す機会がある方がいいのか、もう少しその手前からお話をする機会があった方がいいのかということを考えていました。

川原

私も4年前私が初めて参加させてもらったときに、「話していない人に話してほしい」と思い最後に一言をいただいた結果、まさに同じような印象を持って「あっ、これはいいな」と形式化させていました。最後に皆がどれぐらいの思いで結集しているのだろうということもわかります。これを最後にやるべきか、もう少し早めに色んな人が話せる仕掛けにするかというのは確かにあるのかもしれない。改めて皆さんの御意見、感想を聞かせていただければと思います

事務局

質疑応答の際にグループの代表が答えてしまうのは今回も多かった気はします。私も最後の発表を聞いて「ああ、こんなこともあったんだ」とすごく感じました。

杉崎

今の議論を聞いていて気づいたことですが、まだ1次コンテストなので、グループの皆の気持ちがあるにしろってなくても、これからチームを作っていけば良いと思います。審査員もそのつもりで聞かなくてはいけなかなと思いました。

川原

そういう意味で言うと、自分のグループの代表者の人が本当に一生懸命話

杉崎

しているのをメンバーが見ることにより気持ちが動き、最後の最後でそのメンバーがすごいことを言ったりすることもある気がしました。あまり早いうちにそのような場を設けるより、最後に今までサブのような人が話す言葉、話すタイミングがあるというのもいいのかもしれないですね。

多分そのプロジェクトに対して関わり方が違う人だったら、その人なりのアイデアが出てよいいのではと思います。そういうのを引き出す質問もあっていいと思いました。リーダーが引っ張りすぎているのではないかという観点から質問してしまう恐れが私にはあると思いました。

川原
松村

確かに、その考え方は大事かもしれません。

多分、質問する側は、割と正しい答えを求めてしまい、それに対して適切に答えられる人が答えてしまうと思います。多分もう少し違う問いかけ方をすると、ほかの方でも答えられるというのものもあるかもしれません。

川原

もう少しほかの方に聞いてみたいというときの投げかけ方について、我々が一度議論してみるというのはいいかもかもしれません。

杉崎

例えば、プロジェクトとの関わり方を聞いて、リーダーと違う立場で関わっていることが分かれば、「その立場からだとどういうことができそうですかね」と投げかける。

川原

我々が、「関わっている方にそれぞれの立場や温度差があるのは重々承知しています。そういう前提の上で聞きます」と思っていることを提案者に伝えることで、気楽に話していただけるのかもしれない。

事務局

今、話を伺っていて思ったのですが、1次コンテストと2次コンテストの進め方がここ2年くらいで似通ってしまっている気がします。昔、1次は模造紙のみで、情報収集タイムのホワイトボードもありませんでした。今では1次も2次も同じやり方になっています。そこに差をつけて、1次はまず「夢を語ってもらおう」という部分をきちんと優先した進め方にするすることで、提案者側も本音を話しやすくなるのではないかと思います。

川原

1次と2次を並べてみて考えてみると良いかもしれません。どうしても発表のツールがコロナの影響で限られてしまって、一緒になってしまっているのはあります。植松さんの問題意識と重なるところがあるのかもしれない。

植松

昔は情報収集タイムのときにホワイトボードの前に行くと、提案者の皆さまがたくさんいて、今までアピールし切れなかったものをそこで伺うことができました。また、公開議論の後、最後にまだお話ししていない方から話を聞くことで、そこで本質が見えたということは確かにあって、「あっ、分かって選べた」という充足感がありました。

川原	1次コンテストでは中心となっている方以外の熱い思いを受け止める時間がもう少しあると良いですね。今後の工夫として事務局の皆さまを中心に考えていければと思います。
杉崎	配信、演出の話がありましたが、YouTube配信は公開性の観点からしてとても良い取組だと思うので、コロナの状況にかかわらず、YouTube配信をする前提でのプログラム作成をしていくのが良いと思います。
川原	ハイブリッドを前提に企画を考えていただくというご提案ですね。では、議事の2つ目、「令和3年度の活動懇談会」について、事務局の御説明をお願いします。
事務局	「資料2-1 1次コンテスト通過グループ活動懇談会について(案)」 「資料2-2 令和3年度活動懇談会「ステップアップシート」」 「別紙1 緊急事態宣言を考慮した整備成果報告会及び活動懇談会の実施方法について(案)」を説明
川原	まずは対面の場合について議論をしながら中身を御理解いただくとともに少し議論をして、それを踏まえてこの緊急事態宣言下でどうするかという流れにしたいと思います。
杉崎	整備成果報告会、活動懇談会については部会に含まれず、委員というよりはむしろグループの皆さまとOBのアドバイザーとのやり取りが主ですが、その前提で委員はどのような参加の仕方が効果的かの議論ですね。
川原	委員は審査員でもあるので、ある方向に誘導してしまい、委員の助言を聞かないと2次コンテストを通過できないのではないかとグループの方に思わせてしまうという懸念もある。 今回の活動懇談会は部屋が分かれているから、前回の反省点であったような、部屋が同じで聞きづらかったということはないかなと思います。ホワイトボードは議論中に自由に使えるようにしていただくと良いですね。 提案グループのまちづくりコーディネーターは決まっていますか？
事務局	候補は挙げていますが、全部は決まっていません。
川原	事務局としては、この時点までにはまちづくりコーディネーターを基本的には決めて臨むようなイメージでいらっしゃいますか。
事務局	はい。
川原	活動懇談会の時にまちづくりコーディネーターと提案グループの方が初顔合わせで意見がかみ合わないといったこともあったので、ある程度まちづくりコーディネーターと提案グループの方がやり取りをした前提で臨めるといいとは思っています。
事務局	承知しました。昨年度の活動懇談会において、杉崎委員長からまち普請事業の趣旨を説明していただいた時間がありました。それを今年度も行っていただいた方が提案グループの方の再認識につながるのと良いと感じていま

	すがいかがでしょう。
杉崎	2次コンテストの審査基準も交えながら、まち普請事業の趣旨についての案内を再度したいと思います。
川原	通常どおり開催する場合ということで、何か御意見はありますか。なければ、オンラインを導入する場合、緊急事態宣言下でどうやるかについて議論を移したいと思います。別紙1のパターン2、3について少し議論したいと思いますのですが、違いについて再度ご説明いただけますか。
事務局	パターン2は会場参加かオンライン参加をお選びいただき、パターン3は基本的にオンライン参加にさせていただき、どうしてもオンラインの環境が整えられない等の理由がある場合のみ会場にきていただくということです。いずれも、会場参加の場合は個室に入ってください。
川原	もう少し話を聞きたいと思ったときにアドバイザーと気軽に話せるのが交流タイムのいいところだったと思うのですが、それに代わるような仕掛けができるかどうかですね
事務局	交流タイムはオンライン上で別の会議室（ブレイクアウトルーム）を作って、「アドバイザー〇〇さんに聞きたい方はこちら」というふうにZOOM上で御案内するというのはできると思っています。
川原	パターン2は会場参加とオンライン参加で交流タイムに差が生まれてしまうようであれば、もうパターン2はなく3に徹するというのはあるかもしれません。そうでないと、皆が参加しコロナ対策にならなくなりますね。
松村	私もパターン3に賛成です。実質的な交流を豊かにするための検討をしていくというのがいいと思います。まじめな団体こそ不利益を生じるというのはあまり良くない仕組みな気がするので、そういう意味では公平性を重視した形が良いです。
杉崎	自分の家からオンライン参加していて、どうしていいかわからない人をフォローできるかが気になります。
川原	事前にリハーサルをしていただくような時間を確保していただいて、当日スムーズにブレイクアウトルームを使ったような交流時間ができれば、最低限の目標を達成できるような気がします。
事務局	人員配置や、やり方等これから事務局で検討します。
飯尾	ZOOMに慣れていない人のために、練習を是非していただきたい。
川原	例えば、手を挙げる機能やチャット機能がありますので「意見がある時はボタンがあるので、それを押したら司会から声をかけますよ」など、具体的にアナウンスできると良いですね。
杉崎	1対1ではなくて、ファシリテーターを付けたうえで委員等もブレイクアウトルームに割り付けてもよいかもしれない。
川原	ブレイクアウトルーム側にファシリテーターが1人、それから全体（大元の

杉崎
川原

ところ)にも1人いるとスムーズにいきますよね。
全体のところで雑談をするのもありますね。

後藤
事務局

迷子になってしまった人をどうするかということも考えて、困ったら裏で何か、LINEでもやり取りとかできる別媒体を用意したほうが良いかもしれません。

川原

できれば前日までにリハーサルができると良いですね。

事務局

そうですね。細かい運営の仕方は事務局で整理をして御連絡させていただきます。また、当日委員の方の関わり方として、委員がいない会場ができることが良いのか悪いのか、会場を事前に振り分けたほうが良いのか、自由に行き来する形が良いのかを議論いただきたいです。

川原

決めていただいたほうがシンプルで運営上は楽かもしれないですね。

事務局

あまり今回我々は主役ではないので、むしろ運営で無理のないものにしていただいたほうが良いと思います

川原

運営方法と併せて事務局で検討させていただいて、また改めて御連絡させていただきます。最後に御案内ですが、活動懇談会は、部会の委員としてではないのですが、報酬をお支払いする会になります。整備成果報告会は是非見てくださいということで、お支払いはありません。そこだけ御了解いただければと思います。

松村

整備成果報告会ですが、緊急事態宣言の継続の状況で延期の議論はしていませんが、よろしいでしょうか。

後藤

開催が難しい場合、整備グループに資料を提出いただいてその内容を委員の皆様と共有し、ホームページで公表するというやり方もあると思っています。

事務局

整備成果報告は、報告をいただいて、我々もそれを確認してコメントもしてやり取りをすることに意義があったという気はしていますが、そういう会でしたよね。そうであればなるべくオンラインであっても開催するほうが望ましいのかもしれない。

川原

6団体の日程を既に合わせていただいているということでしょうかから、コロナの状況もよく分からないのであれば、同日に行ったほうが良いと思います。

方法としてYouTube配信だと、お互いの交流というのはYouTubeでのコメントになりますか。

委員の方はZOOMでご参加いただき、ご意見いただければスムーズです。一般の視聴者の方が基本的にYouTubeとなります。

1次コンテスト通過グループはZOOMで入っていただいて、先輩方に質問できるような状況になるということですね。では、同日でやるということをお願いします。

<p>事務局 川原 事務局 植松 事務局</p>	<p>では、3つ目の議題 「(3) 令和3年度整備施設の状況について」をお願いします。 「資料3 令和3年度整備施設の状況」を説明 子安台が未着工ですが、他は順調ですね。 子安台については年度内の完了予定ですが、着工に至っていません。 申請額が「-」なのは何か理由があるのですか。 500万円の予定ですが、まだ整備助成金交付申請書が出ていないので、「-」 の表記としています。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>
<p>資 料</p>	<p>(資料1-1) 1次コンテストアンケート結果 (資料1-2) 1次コンテストYoutube視聴状況 (資料2-1) 1次コンテスト通過グループ活動懇談会について(案) (資料2-2) 令和3年度活動懇談会「ステップアップシート」 (別紙1) 緊急事態を考慮した整備成果報告会及び活動懇談会の実施 について(案) (参考資料) 令和元年度・2年度整備成果報告会について (資料3) 令和3年度整備施設の状況</p>